

中国日本商会

みつま

# 三潑先生の 「ナルホド中国、ナツク中国」



## 三潑コラム 中国「津津有味」-54

人民日報の記事の書き方からもいろいろなことがわかります。例えば、対日記事ですが、本当に日本を厳しく批判する場合と抑制した批判、形だけの批判、色々あります。国際面にだけに批判記事が限定されている場合はまだジャブ程度。更に、一人称による批判ではなく、例えば、外国や、外国にある中国人の団体が日本を批判している、という三人称を使った批判も、まだ抑制的です。本格的になれば、何面かに渡り記事が散りばめられ、勿論、一面にも登場します。

日本に関する記事の内容も長年統計を取ると、面白い変化があります。日本との関係が良好な時は、日本の長所を紹介したり、日本文化を好意的に紹介する記事が増え、時には日本関係記事の70%近くに達したこともありました。日本に対する批判的記事には、抗日戦争による戦争被害を過去の教訓として未来の友好に生かそう、という視点と、この恨みを忘れてはならないといった、積極的に愛国心高揚につなげようという記事があり、どちらが主かは、そのときの日中関係を中国政府がどう考えているかを判断するバロメーターにもなります。このデータから見ると、2000年以降、一番悪化した時は、日本が尖閣列島を国有化した時で、日本を非難する記事で埋め尽くされたものでした。

人民日報から、政府の考え方や社会の移り変わりもわかります。その象徴が「文明」という中国語で、70年代の林彪孔子批判運動（批林批孔）以後、「道徳」という中国語が消え、「精神文明」という言葉に置き換えられていました。

しかし、2000年初めから、最初は「」付きで、そのうちそれも取れて使われ始めました。これは、儒教を儒家の教えとして、宗教の範疇から除外し、統治を支える思想として活用しようという考えが復活したのであって、その結果、「文明」はその頃決まった北京五輪招致に合わせ、モラル、エチケット、マナーを示す語として活用されるようになりました。同じくその頃から急速に普及した語が社区で、それまでの「単位社会」に合わせた居住区割が崩れる中、新しい地域社会として誕生したのです。団地を示す「小区」や、行政の末端組織「街道」との関係が地域によっても違い、時には混乱します。

新聞の論調で面白いのが、一つのテーマについてのリレー式討論で、上記の「社区」の在り方についても、2010年頃からの都市化の在り方についても、政府関係者や学者が1~2年に渡り論陣を張り、その理論化やコンテンツを深めていくやり方は、実に創造的で、パワフルです。

時の指導者の考え方も紙面に深い影響を与えます。胡錦濤・温家宝時代は、共産党機関紙という本来の役割を果たしつつも、内容が豊富で豊かになり、建設的批判なら、政府に物申す的な記事もある程度許容され、文化的な内容も深まりましたが、今の習近平政権で

中国日本商会

みつま

# 三渚先生の 「ナルホド中国、ナットク中国」



は、人民日報は共産党の機関紙であることを忘れるな、その役割に徹底せよ、との強い拘束がかかるようになり、あくまで共産党の主張を宣伝するための新聞になっています。そういう意味では、個性的なコラムは姿を消している、と言えましょう。

今後また、どういう変化を見せるのか、また、じっくり分析してみましょう。